

## 高野房太郎

——在米体験を中心として——

立川健治

## 1 はじめに

わたしたちは、ある人物の思想にはいりこもうとするとき、さまざまな方法をとることができると思う。

わたしはつねづね、「在米体験」をもつ人物の思想を調べていくうちに、とくに明治期では、彼らの思想は、彼らが自らの「在米体験」を思想的にどうとらえていたかをみることによって、かなりの程度まで解きほぐすことができるのではないかと、また、そうしなければ解きほぐせないのではないかと思うようになった。そのもっとも大きな理由は、初期労働運動・社会主義を調べていくうちに、これは「タネ本」をつかまされているぞ、と気づいたことであった。

たとえば、片山潜の思想構造は、かんたんにいえば、欧米の社会は進歩しているから、「正統」で「先端」の社会思想を欧米からとりいれ「タネ本」にするのが、「進歩的」であるということかからなっている、としか思えなくなったのである<sup>②</sup>。片山の『自伝』、『渡米案内』は、生活体験としての在米体験を語ったものとしては、かなりすぐれたものであると思うが、それがまったく片山の思想にいかされていない、思想と生活体験がまったく断絶されている、というのがわたしの実感である。

「タネ本」に自分の思いを託すのは、「タネ本」の紹介としても、それはそれでいいと思う。しかし、「タネ本」を自分の思想とするには、まず、その「タネ本」を自分の生活体験・社会体験でもみこなし、自力で日本の社会構造と格闘しなければならぬ

はずである。高野房太郎・片山潜・安部磯雄・西川光次郎らの思想が、その手統を欠き、彼らの思想を顔面通りうけとることが、「タネ本」をつかまされることになるなら、わたしたちは、「正攻法」から離れてみることも必要だと思う。思想としての「在米体験」から、初期労働運動・社会主義を見直してみようというわたしの問題意識は、ここからきている。

この問題意識からすれば、資料上からも、片山潜・安部磯雄からとりあげるべきかもしれないが、それは別の機会にゆずることにして、本論では、高野房太郎（一八六九～一九〇四）をとりあげたいと思う。それは、高野が、初期労働運動の運動面でのひな形をつくり、その牽引者であったことよって、何よりも一介の「出稼ぎ」としての在米体験をもっていたことよって、思想のなかに、直接その痕跡をみることはできないが、そして、その痕跡をもたずに思想をもち帰った、高野の思想構造から、奇妙に聞えるかもしれないが（実は奇妙ではない）、初期社会主義を考えてみたいことも、その理由である。

なお、本論でいう初期労働運動・社会主義の初期とは、日露戦争までの明治三〇年代の時期をさしている。

① ひろく欧米での体験、と考えてもらってよい。また現実には、体験をもたなくても、欧米の思想によりかかっている人物もふくまれる。

② 詳しくは、別の機会にゆずりたいと思うが、とりあえず、つぎのことをいっておきたい。片山は『都市社会主義』（一九〇三年）の「結論」で、つぎのようにのべている。

「殊に歐米都市の都市政策を記述して市民に紹介するは興味ある事ならんも吾人は貴重なる紙面を以て一の都市問題講義録になすを得ず。故に吾人が過去數十回論じたる事は、直接に我東京市の問題にして且つ直接に一般市民に大關係ある生ける問題を論じたるのみ。」（実業之日本社版 一九四九年 二三頁。）

『都市社会主義』を一読すれば、すぐわかるが、「結論」とはまったく逆に、この著作は、「欧米都市の都市政策」の記述が中心で、「我東京市の問題にして且つ直接に一般市民に大關係ある生ける問題」は、つけたして論じられているにすぎない。片山は、この「結論」を本気でいっているのだが、わたしは、これを読んだとき、片山の発想が、そして思想構造が、手にとるようにはわかる気がした。

「抑も欧米諸市が市民の教育に力を盡すは著明なる者にして、我東京市の如きも大に彼に倣ひ、進歩の態度を取らざるべからず。」（同右、二〇頁。）

「吾人は欧米の諸都市が如何に市場を清潔に且つ美麗に装置せるかを感服する者なり。而して其目的は市民をして善良なる品物を安直に得せしむるにあり。然るに我國の都市は如何、我東京市は如何、吾人は之を云ふを耻する者なり。」（同右、二二〇頁～二二二頁。）片山が、「欧米都市」の矛盾に気づいていても、「都市問題」を論ずる際、「彼に倣ひ、進歩の態度を取らざるべからず」という論理構造をとったことに、片山の思想構造が、典型的にでていると思う。

本論で以後、たびたび片山・安部、あるいは初期社会主義について言及するが、註②でふれたように、それらについては、別の機会に詳しく論ずるつもりである。したがって、本論では、特に必要のある以

外は、その言及について、註をほどきさないことを、あらかじめことわっておきたい。

## 2 思想としての在米体験

高野の社会思想は、おおまかにいってしまえば、労働運動による「近代的労働者」の形成と労働者(民衆)の社会生活の向上と産業社会の実現・富国とを社会経済的にどう融合させるかに、その柱があったといつてよい。この思想を支えていた「労働運動↓社会生活の向上↓消費力の増大↓産業社会の実現・富国」という「経済理論」が、まったくガントンの『富と進歩』(George Gunton, *Wealth and progress—A critical Examination of the Wages Question and its Economic Relation to Social Reform, 1887*) におうものであったことは、大島清の研究によって明らかにされている。<sup>①</sup>つまり、いままで高野の社会思想としてとりあつかわれてきたものは、そのほとんどが「ガントンのもの」<sup>②</sup>だったということである。日本の近代社会思想をみると、わたしたちは、「タネ本」にたよらず自力で日本の社会構造との格闘を通して思想形成をなした思想をそう多くみることはできないが、高野はその意味でごくありふれた存在ではない。高野の現在残されている論稿の多くが、平板でふくらみを感じさせないのは、高野が「タネ

本」の換骨奪胎に終始しているからである。わたしたちは、いままであまりに真正直に、高野の書いたものをうけとりすぎていたようである。組織論、組合論、「経済理論」等にふわけして、つじつまがあうように、それらをいかにもうまくみあわせたとしても、そのことが、「タネ本」をつかまされているにすぎないことを、はつきりさせるべきだと思う。そこでは、いままでとは別のとおりあつかいが必要となってくる。

そこですべてここでは、在米体験との関わりの中で「タネ本」に託した思いをさぐることで、高野の社会思想にふくらみをあたえる方法を、わたしはとってみたいと思う。先の「経済理論」を、高野がそれを借りて自らの「社会ヴィジョン」(ナショナルリズム)——ありうべき社会のイメージ——を描いてみせたもの、<sup>③</sup>というように。

高野の思想としての在米体験を考えると、高野のアメリカにふれた文章が、「高野はコンパースに私淑して、専ら米國労働同盟に倣わんとした」<sup>④</sup>と片山に感じさせた、いわば「アメリカかぶれ」ともいえるべき雰囲気を感じさせた。わたしたちに感じさせることが、そのよい手がかりとなる。そして、「民衆のおかれている物質的な状態こそが、まさに文明の指標であり、文明もその状態が高くなるにつれて進歩するものだ」<sup>④</sup>という高野の発想もまた、そのよい手

がかりになると思う。

これらを手がかりとすれば、高野の思想としての在米体験は、どうやら、アメリカでの生活のなかで、「アメリカ社会」に対する「日本社会」の「後進性」を、実感させられたことにあつたと考えてよさそうである。いいかえれば、「アメリカ社会」の「先進性」を現実的根拠として、さきにふれたような民衆の社会生活もあげ産業社会も実現させるといった「社会ヴィジョン」を形成した、と考えるよさそうである。

「一国一社会にして其文明進むに從うて其国民の生活の複雑を致し其生活程度の上進するは是れ文明の常態なり。左れば一国民の生活の程度は其国民文化の度を卜することを得るものにして、其生活の程度益々低くして其文明の度益々低し。故に一国一社会にして其文明の度を進めんとせば、勉めて其国民の生活程度を上進せざるべからず。其国民の生活の程度低くして、而して其文明の度の高からんことを望むも得べき者にあらず。」<sup>⑤</sup>

「若し吾人にして彼等（日本の労働者―引用者）の教育程度の如何なるかを察し、其家居の有様を思ふ、更に我日本の産業上機械の使用せらるゝ度の若干なるかを思はゞ、彼等の生活程度の如何に卑きかを知るに余りある者なり。然り、彼等の生活程度は甚だ卑し。故に吾人にして国富の隆盛を図らんとせば、先

づ彼等の生活程度の上進を図らざるべからず。」<sup>⑥</sup>

「……しかしわれわれは、アメリカ人と日本人との生活の格差に気づくはずである。つまり、アメリカ人は羊毛の服を着て、肉を食べ、きちんとした家に住んでいるのに、一方日本人は、木綿を着て、米を食べ、粗末な小屋同然のところに住んでいることを……」<sup>⑦</sup>

明治期の欧米帰りの者の思想をみれば、何らかの形で日本の「後進性」を思いしらされている姿を見出せるが、片山潜・安部磯雄ら初期労働運動・社会主義の中心人物に共通なのは、高野と同じく、その「後進性」が主に民衆の社会生活の低さと経済社会の未熟さとして、とらえられていることである。このことは、そこいらの「留学生」でも感じたであろうが、そのような「後進性」を、労働運動・社会運動で何とかしようとしたのが、彼らであるといえなくもない。この意味で、高野の思想としての在米体験は、別にとりたてていうほどのものではないだろう。

だが、高野が「ガントンの思想」を「タネ本」として選択した意味を、つまり高野の社会思想を考えるうえで、つぎのことはいつておきたいと思う。上の引用文の「理論」そのものが、「ガントン」からの盗用でしかないように、「ガントンの思想」をもちかえったことが、思想としての在米体験であるといえなくもない

とは思うが、そこで高野が著しく民衆の「生活程度」に関心をよせていることに気づくこともできるはずである。もちろん、民衆の「生活程度」の「経済理論」における重要性を云々するのは、「ガントンの」ものであるが、そこには「ガントンの」の影響とばかりはいえない、何かがあるのを感じさせると思う。しかも、この「生活程度」に関心をよせるといふことは、「ガントンの」に出会う(一八九一年一月)以前からすでに高野に見受けられ、高野の「体質」とでもいえそうである。それはそれまでの生活環境におうものであった、とでも考えるほかはないと思う。

このことを考えるなら、わたしは、高野が「ガントンの」に出会う以前に、そのいわばうけザラともいふべき、民衆の社会生活の向上と「富国」をコミでもたらしたいという「社会ヴィジョン」をもっていた、という考えをとりたいと思う。いいかえれば、その「社会ヴィジョン」をいかす、あるいはその「社会ヴィジョン」を託せる思想が、「ガントンの思想」であった、という考えをとりたいと思う。のちの高野は、ガントンの出会う以前の(一八九一年八月の「日本に於ける労働問題」)のなかで、その姿をほとんど現わしているから。

「嗚呼日本の労役者は結合せざるべからず、結合せしめざるべからず。彼等は其権利を拡張せんが為めに、其状態を改良せん

が為めに結合せざるべからず。結合は彼等の惨状を救済する唯一の手段なり、否な日本の社会を改良せしむるの一大作用なり。」<sup>9)</sup>

そして、「日本の労役者を結合せしむるに必要な条件」として、「(一)名望ある有識家之を率ゐんことを要す、(二)労役者結合の目的は単に間接の利益に止らず、以て直接の利益を労役者に与へんことを要す」<sup>10)</sup>をあげているのを見れば、ここに、わたしたちが知っている高野の思想の原型を見出してよいと思う。「ガントンの」に出会ったとき、高野が「これだ」と思ったと想像しても、あながちはずれていないはずである。その出会いまでには、高野なりの試行錯誤の道のりがあり、「日本社会」の「後進性」をどうにかしなければ、という心情を託したのだと思う。ただ、そこまでは、誰もが通る道である。本来は、そこから第一歩が始まるはずである。「タネ本」をさがしあてたのちの、「タネ本」のもみこなしかたが、思想の構造を決める大きなものだから。

そしてここでは是非考えておきたいのが、「出稼ぎ」としての体験が、高野の思想のなかでどのような意味をもっていたかである。わたしは、この「出稼ぎ」としての体験に思いをはせるとき、高野の在米体験を、「ガントンの思想」、または、いままでの高野の研究で言及されてきたサミュエル・ゴンパース、AFL、労働闘

士団等の、ようするにアメリカ労働運動の影響<sup>②</sup>に還元してしまつては、何かを欠くように思えてしかたがない。そうしてしまえば、異質な社会での、それも政治・文化・経済・市民生活のあらゆる側面から圧倒的な重畳で迫ってくる社会での一介の「出稼ぎ」の内面のかつ藤を、見落してしまふ気がするからである。

わたしは、思想としての在米体験を、「出稼ぎ」としての体験と、つきあわせることから始めたいと思う。そのことは、おのずから高野の思想構造をうきほりにしてくれるはずだから。

① 大島清「高野房太郎の賃金論——G・ガントンの理論との関連」(『大原社会問題研究所』資料室報』第一九〇号、第一九一号、一九七三年二月、三月。なお、この論稿は、大島「人に志あり」(『岩波書店』一九七四年)に「ガントンと高野房太郎」として収められている。

『富と進歩』を読んで、わたしは、その「高野の『理論』がより詳細に、体系たつて語られてゐる」と感じた。もちろん、実際の順序は逆なのだが、そう感じさせるほど、高野が「この『富と進歩』にたつてゐた」と思う。たとへば、高野の「経済理論」が一応「体系」たつてゐるからである。「富國の策を論じて日本に於ける労働問題に及ぶ」は、『富と進歩』のうぎの章を、翻訳再構成したものである。(わたしが読んだのは、京都大学農学部農林経済学科図書室所蔵のLondon, Macmillan and Company, 1888 版による。)

*Introduction*, pp. 1-14. Part I, Chapter II, Section III. *The Economic Law of Wages* pp. 76-78. Section IV. *Standard of Living*, pp. 76-95. Chapter IX. Section I. *How Standard of Living is Determined*, Section II. *Social Wants, How Determined*.

Section III. *The Influences which Determine Social Character*, pp. 187-203.

だがわたしは、高野の思想構造を考へるうえで、高野の論稿と『富と進歩』をつきあわせることや、「ガントン」によりながらも、そこにどのみうに独自性をうけわたたかをきくことは、あまり意味がないと思う。そのことよりも、「ガントン」を「タネ本」とした「と自体が、思想的に何を意味するか」を考へたことと思ふ。

ガントンのことば、Jack Blicsilver "George Ganton; Pioneer Spokesman for a Labor-Big Business Enterprise" *The Business History Review* Vol. 31 No. 1 Spring 1957 参照。

② カッコをつけたのは、ガントンとその理論の枠組を、アイラ・スチエワートにおつてゐるから。(二村一夫「職工義友会と加州日本人靴工同盟会」黎明期日本労働運動の再検討(『労働運動史研究62号』)一四二頁〜一四六頁、労働旬報社、一九七九年。)以下、同じ。

③ 片山潜「わが回想 上」二八〇頁、徳間書店、一九六七年。

④ たとへば、高野房太郎 *The Japanese Workers Condition, American Federationist*, II, No. 7 (September, 1895). 同 *Typical Japanese Workers, Far East*, II, No. 4 (April, 1897), A Substantial portion of this piece was published as "Conditions of Labor in Japan," *Ganton's Magazine*, XIII (April, 1897). 以下、特に

記さなからきり、高野の論稿の引用は、ハイマン・カプリン編著『明治労働運動史の一齣』(有斐閣、一九五九年所収の「高野房太郎文集和文篇・英文篇」)による。英文篇一六頁〜一八頁、三〇頁〜三九頁。

⑤ 高野房太郎「愛國」記者に告ぐ——労働問題の一端『遠征』第一九号、一九二二年二月一日。和文篇一〇三頁。

⑥ 高野房太郎「富國の策を論じて日本に於ける労働問題に及ぶ」『東京経済雑誌』第六十二号、一九九三年二月一日。和文篇一〇一頁。

⑦ 高野房太郎 *Labor Movement in Japan, American Federationist*, I, No. 8 (October 1894)。英文篇五頁、六頁、なほ、和訳は引用者による。以下、同。

⑧ George Gunton, *op. cit.*, pp. 88-96, pp. 187-201.

⑨ 高野房太郎「日本に於ける労働問題」『読売新聞』一八九一年八月八日。和文篇九二頁。

⑩ 同右、一八九二年八月一〇日。和文篇九二頁、九五頁。

⑪ 高野は、「ガントン」に出会ったときの感激を、弟岩三郎につきのように伝えている。

「小生の翻訳セルハ社会主義ニ反対シ「ミル」派経済旧学派ニ反対シ独得ノ眼光ヲ以テ至大ノ経済問題ヲ論断セル「ジョージ・ガントン」氏ノ「Wealth & Progress」ナリ、給料(勞銀)ハ需供ノ作用ニ依リテ高低スル者ニアラス純益ハ給料ノ騰貴スルト共ニ低減スル者ニアラス、借地料、利子又然リ第一者ハ生活程度、第二、三、四者ハ給料ノ騰貴ト共ニ其取額ヲ高ムル者ナリ、社会進歩ハ実物的ヨリ知識的更ニ徳義的トノ順序ヲ以テ進ム者ナリ杯種々ノ新説掃納法理ニ依リテ論究シテ殆ンド余ス所ナキガ如シ、是迄聞キ及ビタル事ナキ新原則等論究有之候若シ貴弟ニモ御志アラバ原本御廻申候テモ宜敷候一(高野の弟岩三郎宛の手紙 一八九二年三月七日付。大島清「労働組合運動の創始者・高野房太郎」『大原社会問題研究所』『資料室報』第一二四号 一九六六年一〇月所収 一三頁。)

⑫ 「アメリカ労働運動」が、高野にあえた影響については、つぎの研究が、その代表的なものである。

前掲大島「高野房太郎の賃金論——G・ガントン理論との関連」(H) (F)。前掲二村「職工義友会と加州日本人靴工同盟会」。隅谷三喜男「日本の社会運動とアメリカ」『デモクラシーと日米関係(日本とアメリカ—比較文化論—)』南雲堂一九七三年 所収。同「高野房太郎と

労働運動——エンバースとの関係を中心に——」『経済学論集』第二一九巻第一号、一九六三年四月。隅谷のこの二論稿は、『日本貨労働の史的研究』(御茶の水書房 一九七六年)の第六章・第七章として、それぞれ取められている。以下、「高野房太郎と労働運動——エンバースとの関係を中心に——」の引用は、同書による。

### 3 「出稼ぎ」としての在米体験

思想的にみれば、まがりなりにも「経済学」をものにし、「労働運動思想」をもって帰国した高野の軌跡は、「出稼ぎ」のそれとは異質の在米体験をもっていたことを、うかがわせるに充分である。それは、そもそも高野が、強い社会的な関心ともいふべきものをもつて渡米し、「アメリカ社会」に入っていたことを示しているだろう<sup>①</sup>。ある意味では、多くの「出稼ぎ」にとっても、渡米の動機は生活苦だけからくるものでなく、そこに何らかのプラスアルファがあったともいえる。だがここでは、思想的にみたとときの高野の軌跡は、「出稼ぎ」のそれとは大きく異っていたという考えをとりたいと思う。なぜなら、当時の多くの「出稼ぎ」にとって、一刻でも早く金をもうけて帰国することが最大の目的であり、「アメリカ社会」のありようなどは、せいぜい「みやげ話」のタネになる「目新しい」ものでしかなかったはずだから。ここでは、多くの「棄民」が生まれたはずであり、大部分のもの

が「失敗者」であったはずだ。「アメリカ社会」は、「自由」を感じさせるものであったかもしれないし、あるいは逆に、「匪乘」すべきものであったかもしれない。

亀井俊介の指摘するところによれば、高野の在米時期である一八九〇年代は、「排日」などの問題で、それ以前日本人によってもたれていた政治的・宗教的「自由の聖地」アメリカというイメージに変わって、金銭的成功の最も「自由」な「移民の楽土」アメリカというイメージが、強まった時期だそうである。この「移民の楽土」というイメージが、人々にとっていかに魅力的であったかは、一八九〇年代以降の在米日本人者数の増加に示されている。④だがそのイメージを支えていたのが、逆説的な意味で、無残な生活をしいられた多数の「出稼ぎ」であったことを、忘れるべきではないと思う。

いまわたしたちにとって必要なのは、渡米者の大部分である「出稼ぎ」にとつてのアメリカが、異質の社会での生活でしかなかったこと、それも無残な生活をしていたものでしかなかったことである。

高野の思想と在米体験を結びつけようとするとき、ハイマン・カプリンのつぎのような指摘は、その代表的なものである。

「高野の思想に及ぼしたアメリカの根本的な影響とは、ほかな

らぬ工業化と、それが文明の進歩をもたらす可能性とを、彼が深く認識したということであった。機械の広汎な使用によって財貨の生産が増大することは、たんに労働者の労働の意欲と動機を改めさせ、その地位を引き上げるばかりではなく、彼らがかつて夢想だにしなかった物質的および知的利益を彼らにもたらすであろう、と彼は信じていた。(中略) 機械というものは、人間によって善のためにも悪のためにも利用しうるものだ、と彼はひそかに考えていた。したがって、高野の基本的な、また窮極的な目的とは、工業化を正しく利用することによって日本における文明の水準を引き上げ、世界の最も進んだ国々の隊伍に日本が加わるのを促進することにあった。」

この指摘は、高野の在米体験を思想的なものにだけ限定すれば、これ以上つけ加えるものは何もない、といってよいほどのものである。だが、高野の「出稼ぎ」としての在米体験を考えると、この思想としての在米体験を、そのままうけとることはできない、いいかえれば、それが選択であった意味(何をしゃ断したか)を解きほぐそうとする問題意識を、わたしたちにはもたねばならないと思う。

たとえば、アメリカの労働者の高い社会生活を、つぎのようにとらえるのが、高野の思想としての在米体験にみられる典型であ

る。

「米国の事を云ふ者、先づ米国に於て特殊の一階級者の存在を認めざるべからず、即ち労働者階級と云ふ。彼等の勢力は偉大なり。唯々其政界に依りて得たる政治的勢力のみならんや、彼等が有する経済的勢力に至りては、吾人実に其偉大に驚かずんばならず。(中略)其の数を以てすれば幾百万を以て算すべく、其世界に於ける最高賃銀の受取者として、彼等が営む所の生計程度——吾人は程度と云ふ、敢て費用と云はず——の高き、実に我国民の夢視せざるの点にあり。従つて彼等が米国の産業界に於ける勢力の甚だ偉大なるや、亦想像するに難からず。」

だが高野がこのように書いたとき、その背後に、失業状態で食費にもこと欠き、孤独のなかで病気で苦しみ、借金でやりくりして家族へ送金し、そのなかで「事業」への夢もしほみかけ、また「排日」で屈辱をあじわされた、というような高野の在米時の生活、そして日本での家族の厳しい生活があったことを、わたしたちは見落すべきではない。⑥。そもそも単なる「旅行者」か、よほどオメダタイ「留学生」でも想定しない限り、「先進国」での生活において、「後進国」の人物が、「文明」に酔い続けられることなどできるはずのものでないことは、すこし考えればすぐわかることである。仮に、酔ったとしたら、あるいは酔ったかのように

みえるのなら、わたしたちはその背後にあるねじれまでみなければ、その酔いの意味はわからないと思う。だから、たとえ高野が、直接的な意味で自分の在米体験を多く語っていないくても、わたしたちは、それに思いをはせることが必要なのだ。高野は数多くアメリカについて語ってはいるが、肉声は固い文体のなかに閉じこめられていて、固さをほぐさなければ、生の体験をうかがうことができない。その体験がある程度うかがえるのが、高野の処女論稿といえる「ヤンキー」という一八八九年の『読売新聞』へのアメリカからの通信文である。

高野はこの「ヤンキー」のなかで、「我々文明社会の田舎漢とも云ふべき日本人が一度文明の一大都会なる此國に來りて見る物聞く物皆新奇を極むる中」で最も驚かされるのは、「男女交際」の「自由・情交・自由結婚」であるとのべたあと、二三年の在米体験をへて「アメリカ社会」をみる目がどのように変ってきたかを、つぎのように書いている。

「……要するに最初の二二年の年は新奇の事物の為に眩惑せられ米國の文明に心酔せし時期なりしなり。最後の一年間ハ既に其酔を破つてしらふの人間となりしなり。已にしらふの人間となつて觀察したる以上は其結果ハ容易に變ずべき者にあらず。」⑦。高野がここでいっているのは、ようするに時間がたつにつれて

アメリカの「男女交際の自由」の実態が、わかってきたということにすぎない。高野が、いくらかなりとも「アメリカ社会」について批判めいたものを書いたのは、この「ヤンキー」だけといってよいが、批判したことよりも、批判めいたものを書いたのが、この「ヤンキー」だけであることの方に、わたしは注目したいと思う。その批判した点をとらえて、大島潜はつぎのようにのべている。

「……「ヤンキー」の一文を送ってアメリカ近代社会の明暗を故国の読者に伝え、いわゆる文明の虚飾、ブルジョア社会の醜状をするどい眼光をもって観察し批評した。」

だがこの大島の評価では、高野がのちに「アメリカ社会」を批判した文章を書かなかった意味がわからないし、高野の思想構造にてらしあわせても、首をかしげざるをえないと思う。たしかに高野は、この「ヤンキー」で「米国の男女関係贅すべし賞すべし、然れども其の刺げあるを如何せん」<sup>⑨</sup>と書いているとはいえ、あとでのべるように社会思想を形成するにさいしては、「贅すべし賞すべし」の部分だけをとりこんだことを、わたしたちははしっているからである。高野はここで、「文明の虚飾、ブルジョア社会の醜状」をいいたかったのではなく、結局「文明の明るさ」をいいたかった、と考えたほうがよいと思う。

「嗚呼此の如き有様（アメリカの夫婦の「相思の情」や「一家の内」が「和氣洋々」としていること——引用者）ハ到底（今日）の如き男女関係の行はるゝ間は（我）日本に於て見ることを得ざる者にして、米國が遙かに我日本に優る所なり。」

この言葉のなかに、「日本社会」の「後進性」を思いしらされている姿を、発想の原型を見出すのが、高野の心情に最も近いと思う。一八八七年の家族への手紙のなかでも「男女交際」に興味を示しているように、高野が渡米直後の時期まず、「男女交際の自由」に目をうばわれたことは確かである。ほかならぬ「男女交際」に興味を示したことに、高野が、自分達家族の生活の苦しさからの、自分のしかかっているものからの、そして「日本の社会」の重苦しさからの「自由」を、いいかえれば「先進性」を、「アメリカ社会」に見出したことが象徴されている、と考えてもよいと思う。

この「アメリカ社会」の「自由」・「先進性」は、「ヤンキー」と同じく『読売新聞』への通信文である一八九〇年の「北米合衆國の労役社会の有様を叙す」では、つぎのように言い表わされている。

「吾人は実に北米合衆國労役者の結合が、労役者をして今日の如く其政治上に於て偉大の勢力を有するに至りたる一因たるを

信ずると同時に、更に其結合の力が労役者をして今日の如き他  
 國の労役者が曾て享有せしことなき安寧幸福を樂しましむるに  
 至りたる原因なりと惟ふ。<sup>⑭</sup>」

ここでもこの論稿をまともにふわけしたら、「タネ本」をつか  
 まされることになる。<sup>⑮</sup>ここでは、この頃すでに、このようなもの  
 を書いたことのなかに、高野が「アメリカ社会」の「先進性」と  
 「労働運動・労働者の安寧幸福」を結んでいたことを、あるいは  
 結ぼうとしていたことを注目するだけで充分だと思ふ。しかも、  
 「男女交際の自由」に着目したのと同じ発想で、これをのちの活  
 動と結びつけるなら、欧米の社会・文化に興味をもち、また「事  
 業」にも夢をもちつつも、「出稼ぎ」としての体験をしいられて  
 いた二十代前半の青年が、渡米後の数年で、一つの立場を選択し  
 始めていたともいえるだろう。つまり、どうしたら日本の「労働  
 者の安寧幸福」をもたらすことができるのか、ということを知り、  
 自分が過去において生活上の辛酸をあげたからといって、  
 また現にあじわいつつあるからといって、必ずしも同じような境  
 遇の者に思いをよせるとはかぎらない。そこでは、同じ境遇の者  
 への反感・憎悪をもつことも、金のためなら他人をふみつけても  
 という「エゴイスト」となることも、また高野のように思いをよ  
 せることもありうるだろう。それは、ここでは、すべて「可能性と

して同じようなものであり、その人物のあとの軌跡と結びつけた  
 ときに始めて、その選択の意味を考えられるのだと思ふ。

この「思い」が労働運動に結びついたのは、高野なりの社会的  
 関心、「社会ヴィジョン」が、根拠になっていたと思う。なぜな  
 ら、一つには、当時サンフランシスコ周辺の日本人社会では、  
 「亡命民権家グループ」がかなり活発に活動しており、自由民権  
 運動の余じんにとびこんで、政治に力点をかけた「社会ヴィジ  
 ョン」をもとうとすればもちうる可能性は充分あったのに、まった  
 くそれに関心を示さなかったから。<sup>⑯</sup>もう一つには、順境から逆境  
 におちた生活体験、あるいは弟岩三郎がいうように「強きを挫き  
 弱きを助けるという幡隨院長兵衛的氣象<sup>⑰</sup>を生むような生活体験  
 からきたものと考えられるから。そして、民衆の社会生活の低さ  
 と産業社会の未熟さとで、「日本社会」の「後進性」を実感させ  
 られていたからである。「アメリカ社会」の「先進性」を労働者  
 の「安寧幸福」を通して見たことが、労働運動への関心と結びつ  
 く、あるいはその逆が、それまでの生活体験におう選択であり、  
 そこに高野なりの「社会ヴィジョン」が働いていたことだけは確  
 かだと思ふ。あるいは、その「社会ヴィジョン」から、このよう  
 な選択をしたといえるかもしれない。

高野が渡米・再渡米したのは一八八六・八七年のことであるが、

1894年  
(26歳)

〜グレイト・バーリントン(マサチューセッツ)。この間、「家事労働」などをする。3月、サミュエル・ゴンパース(AFL会長)に手紙を書いて、日本の労働運動への助言を求める。以後、数回。4月、ニューヨークへ。5月、アメリカ海軍の水兵(マチアス号食堂勤務)となる。出航(11月)までの待機期間を利用して、ガントン主宰「社会経済学院」に通う。この間、「労働騎士団、AFL傘下の組合などに、労働運動のあり方などをたずねるとともに、組合規約などを入手。9月、ゴンパースに面会。以後、数回。AFLの正式のオルガナイザーとなる。11月、マチアス号出航。(96年、夏、横浜で脱艦。)

“Labor Movement in Japan” *American Federationist*. 10月。

在米中、毎月10ドル程度の仕送りを、家族に送り続けた。また日本の新聞、『国民之友』などをとりよせ、日本の社会状況に関心をもち続けた。

参考資料：『遠征』（サンフランシスコ）1892年7月〜1894年12月。高野岩三郎「兄高野房太郎を語る」『明日』1937年10月号(大原社会問題研究所『資料室報』第145号、1963年10月所収)。隅谷三喜男「高野房太郎と労働運動——ゴンパースとの関係を中心に」『経済学論集』第29巻第一号 1963年4月(『日本賃労働の史的研究』御茶の水書房1976年所収)。大島清「労働組合運動の創始者・高野房太郎」(一)(二)(三)(前掲『資料室報』第106号、第124号、第139号、1965年1月、1966年10月、1968年4月)。二村一夫「職工義友会と加州日本人靴工同盟会」(『黎明期日本労働運動の再検討(労働運動史研究62号)』労働旬報社、1979年)。「高野房太郎」『日本社会運動人名辞典』青木書店1979年、所収。

『在米日本人史』によれば、当時の日本社会は一八九〇年代以降の「出稼ぎ」主流の時期とは異って、「米国で一と旗揚げようとする、野心勃勃な覇気満々たる青年」からなるものだったそうである<sup>⑩</sup>。だがわたしたちは、この『在米日本人史』の記述にあまりひきずられてはいけないと思う。なぜなら、いかに「野心勃勃な覇気満々たる青年」であったとしても、何らかの形で経済的裏付けのある者以外は、労働に、それも下層の労働に従事しなければならなかったのが、渡米者が、まずぶつかった現実だからである。つまり、大多数の渡米者は、生活で「アメリカ社会」に入っていくかざるをえなかったからである。この体験は、ハクをつけるために渡米した物見遊山気分のもや、生活の心配のない「留学生」などとは、決定的に異なるものをしていはずなのだ。高野も、高野家のもち山を処分して再渡米し、サンフランシスコで雜貨店を開いたとはいえ、その失敗後は、たとえどのような志をもっていたとしても、多くの渡米者と同じく、一介の「出稼ぎ」として「アメリカ社会」に入らざるをえなかったはずである。

さきにもふれたように、高野は「出稼ぎ」としての体験を直接書き残していないので、わたしたちはそれを推測するよりほかないが、たとえば「職工諸君に寄す」のつぎのような個処は、それとして読むこともできると思う。

## 高野のアメリカでの足跡

年(年齢)	足 跡	論 稿・そ の 他
1882年 (14歳)	横浜の伯父の回漕店で事務見習として働く。 横浜商業夜学校へ通う。この間、高田早苗などと呼んで、伊藤痴遊らと「講演会」を開いた、といわれている。	この頃より、渡米の意志をもつようになった、という。
1886年 (18歳)	高野一家のうしろだてだった伯父死亡。12月、渡米。	
1887年 (19歳)	オークランド～ブーン・アンタレス(カリフォルニア)～ポイント・アリーナ(カリフォルニア)。この間、「家事労働」・「劇場の下働き」などをし、「製材所」でも働く。秋、一時帰国。日本雑貨店の経営資金を作るため、長崎にある高野家のもち山を処分して、再渡米。	一アメリカ婦人から、英語を学ぶ。小説を読み、翻訳をする。以後、ディケンズなど数多く小説を読んだようである。9月、岩三郎、第一高等学校予科入学。
1888年 (20歳)	サンフランシスコへ。友人と共同で日本雑貨店を開く。	
1889年 (21歳)	2月頃雑貨店失敗。サンフランシスコを出て、ポイント・アリーナの「製材所」で働く。秋、シアトル。この年、城常太郎と知りあう。また、ジョージ・マクネイル編『労働運動—今日の問題』を読み、労働運動に関心をもち始める。	「ヤンキー (Yankee) 第一回」(『読売新聞』10月)。
1890年 (22歳)	4月、タコマ。10月、サンフランシスコへ。以後、「家事労働」・「日本料理店の給仕」・「ホテルの客引」・「移住民局の通訳」・「スクール・ボーイ」などをして働く。この頃、日本での「材木伐出場」の設立を計画し、岩三郎に、熱心にその関連の調査を依頼。	「北米合衆国の労役社会の有様を叙す」(『読売新聞』5月)。
1891年 (23歳)	サンフランシスコ商業学校別科入学。(翌年1月、課程修了。)夏、城常太郎、澤田半之助らと「職工義友会」を結成。11月、ジョージ・ガントン『富と進歩』を入手(翌年3月、翻訳完了)。この年、「労働騎士団」の機関紙を定期購読するようになる。	「日本に於ける労働問題」(『読売新聞』8月)。 岩三郎、第一高等学校本科入学
1892年 (24歳)	2月、タコマ。暮、サンフランシスコから一時帰国。「材木伐出場」調査のためか? すぐ、アメリカにもどる。この頃より、リカード、マーシャル、ミルなどの経済学を熱心に勉強。また、労働問題の論客として、在米日本人の間で、名を知られるようになった。「日本人排斥」に強い関心を、もつようになっていた。	「金井博士及添田学士に呈す」(『国民新聞』5月)。 この論稿以降の高野は、まったくの「ガントニアン」といってよい。『愛国』記者に問フ・『愛国』記者ニ与フ・『愛国』記者に告ぐ—労働問題の一端(『遠征』(サンフランシスコ)7月, 8月, 11月)。9月、岩三郎、東京帝国大学法科大学入学。(95年7月、卒業)。
1893年 (25歳)	タコマ～サンフランシスコへ。10月頃、シカゴ。「シカゴ万国博覧会」で日本商品販売所の「売り子」をする。以前より、「万国博覧会」の観覧を希望。	「富国の策を論じて日本に於ける労働問題に及ぶ」(『東京経済雑誌』2月)。

「今日に於ては、職工にして一度災厄に逢はんか、一に他人の救助を仰がざるべからず、其獨立の體面を汚すこと少々にあらず。又時としては依るべき他人なくして非常に困難を極むることもあり。之に反して組合より救助を受くるは恵まるゝにあらで、約束上受取り得べき金額を受くる者なれば、毫も獨立の面目を汚すことなく、又災厄の場合に對し既に其困難を薄ふべき方法の附き居る以上は、殊更此等のことに苦慮して卑屈の行ひをなすを要せざることとなり、自助の精神自信の意氣大に昂り為めに職工の品位を高むること慚なからざるべし。」<sup>⑩</sup>

また別のところでの常識的な「女工保護」とはズレがある、つぎのような文章も、金で苦勞した体験として読めないことはない。

「拳家勞に服して尚飢寒を覚ゆ、此時に當て女工幼工の就職及勞働時間を制限する其結果は如何。無業の民を以て充滿する工業社会果して此等の制限の為めに給料の騰貴、工業の繁栄を致すことを得るか。微弱なる労働社会に行ひたるの改良は往々反對の結果を生ず、注意する所なくして可ならんや。」<sup>⑪</sup>

そして、労働者は金銭的メリットがなければ労働運動に参加しない、<sup>⑫</sup> という発想も、金で苦勞した体験が素地になっていたとも考えられるのである。

わたしはそこに、高野自身の在米時の生活体験の一端を読みと

りたいと思う。病気で働けないのに誰も助けてくれなかったこと、仕事がなく蓄えもつき食うや食わずで何とか家族に送金したこと、突然クビをきられたことを。そして、人にだまされ金をむしりとりられ、裏切られたこと、逆に今度は自分がサギまがいのことをし、人をふみつけにしたことなどがあつたことを。一介の「出稼ぎ」の異質な社会での生活は、そのようなものをしいらすには、おかなかつたはずだから。そこでは当然、「アメリカ社会」とのきしみが生じていたはずである。たとえ、内村鑑三が「余は如何にして基督教徒になりし乎」に描いたような、「アメリカの理念」との思想的格闘をしているようなきしみでなくとも、当時すでに存在した「排日」の雰囲気なかでの屈辱的な体験を通して、「アメリカ社会」のうざん臭さを感じとる契機が、高野のまわりにもあつたことは、高野の断片的な資料からも推測できる。<sup>⑬</sup> しかも、よく知られているように一八七〇年代以降ふきあれた「中国人排斥」の嵐の余韻は、太平洋沿岸、とくにカリフォルニアでは充分残っていたのである。そして、アメリカで「事業」の基礎を作るといふ夢に破れかけている自分を契機としても、「アメリカ社会」のうざん臭さは感じとれたはずである。<sup>⑭</sup>

だが高野は、それらの体験を脇においたまま、当時の「在米体験」をもつ多くの知識人、そして片山潜・安部磯雄・赤羽一・幸

徳秋水ら「社会主義者」と同様に、「アメリカ社会」を「日本社会」より、まじな「先進・文明社会」ととらえたのである。<sup>②④</sup> このようなとらえかたは、社会思想と生活体験をしゃ断する思想構造と地続きである。

いわば「アメリカ社会」の現実を目をつぶって、そして生活上でなめさせられた辛酸にも目をつぶって、「労働者の安寧幸福」を「アメリカ社会」の「先進性」の象徴として、つまりいいところだけをとらえたのが、高野が思想的にとらえたアメリカ、思想としての在米体験であった。

高野は、日本の「後進性」を、民衆の社会生活の劣悪さと未熟な産業社会とに還元しているが、それは、このような思想としての在米体験と裏表の関係にあると思う。「アメリカ社会」の「先進性」をこのように実感させられたから、日本の「後進性」をそのようにとらえる、あるいは逆に、日本の「後進性」をそのように実感しているから、「アメリカ社会」の「先進性」をこのようにとらえた、というように。

「義心と俠気とに富めりと称せられるゝ日本人にして、社会の一面には不正なる制裁の下に束縛せられ、悲愴痛苦の境遇に呻吟するものあるを見て、恬として之を顧みざるが如きものあるは何故ぞ、知て然るか將た知らずして然るか。」<sup>②⑤</sup>

「数年前米国の土をふみ、以来、この国の労働者のめぐまれた生活に目をみはるにつれ、わたしの思いは日本の労働者に向いました。社会的物質的見地からみれば、日本の労働者の現状は惨憺たるものであり、帰国後すぐ、彼らの現状の改善にとりかろうと決心するにいたりました。そのために、在米中でぎうる限り、アメリカの労働運動の研究にはげみたいと思います。」<sup>②⑥</sup>

「英し夫れ我製品（日本製品——引用者）にして果して其品質其価格、能く米国品と競争するに足る者ならしめば、吾人は我国人の認めて禁止税に均しきとなす重税を課せらるるを憚らず。

然れども我製品が今日に於て其品質上能く米国品と競争するが如きは、手産品以外得て望むべきにあらず。唯僅かに賃銀の廉なるを利し、欧米最新の器械を応用し、以て米品と競ふことを得るのみ。此の如き製品に向って、米国政府が苛重の関税を課するのは、正に其至当の権利内に属し、吾人の得て容喩すべき者にあらざるのみならず、世界の公道にも亦実に我を非認するなきを保せざる也。」<sup>②⑦</sup>

ここから、「アメリカ社会」をモデルとして「日本の社会」をみる、また逆に、「日本の社会」を批判的にみるから「アメリカ社会」をモデルとする、という高野の社会批判の方法が形作られているのである。多くの「近代主義者」が、これと同じ方法をと

っている。

高野とほぼ同じ時期に、欧米での留学体験をもつ新渡戸稲造は、自らの留学体験を回想した「帰雁の蘆」（一九〇七）のなかで、欧化政策は日本の国是で後もどりは出来ないから、欧米社会に悪いところがあっても、良いところだけ学んで、欧化政策のよりよい遂行のために役立てることが大切だ、という意味のことをいっている。このような考え方がさきの社会批判の方法と結びつくだが、これは、日本の「近代化」を欧米化とイコールに考える者に共通したものである。高野も、分類すればそのような「近代主義者」の一人であったと思う。片山潜も安部磯雄も、日本のよりよい「近代化」のために自分の在米体験を役立てようと「社会問題解決」の思想をもち帰ってきたが、高野も同じように思想をもち帰ってきたのである。

以上のことから、高野の「労働運動論」は、つきつめてしまえば、日本の労働者の「アメリカ化」を日本的にいかにしてもたらずかであったといってもよい、というのがわたしの考えである。

① 弟岩三郎によれば、高野は勉学がすぎて、横浜でも働きながら夜学へ通うとともに、伊藤痴遊らと講演会も開き、そしていつかは、アメリカにいったいって勉学をしたい希望をもっていたそうである。（高野岩三郎「兄高野房太郎を語る」『明日』一九三七年一〇号。以下、同文の引用は、大原社会問題研究所『資料室報』第一四五号 一九六八年一

〇月所収のものによる。一七頁。）

② アメリカでの日本人「出稼ぎ」については、入手しやすいものでは、つぎの著作が参考になる。

カール・ミネダ『在米日本人労働者の歴史』新日本出版社 一九六七年。若槻泰雄『排日の歴史』中央公論社 一九七二年。鶴谷寿『アメリカ西部開拓と日本人』日本放送出版協会 一九七七年。竹園友康『リトルトウキョウ物語——ある日系コミュニティストとその子孫たち』四季書房 一九七八年。大谷薫『他人の国、自分の国 日系アメリカ人オザキ家三代の記録』角川書店 一九八〇年。

③ 亀井俊介『自由の聖地——日本人のアメリカ』研究社 一九七八年。④ ある調査によれば、一八八七年には一二〇人であったものが、一八九七年には三五〇〇人にまで増加している。（在米日本人会事務保存部編『在米日本人史』在米日本人会（サンフランシスコ）一九四〇年 五八四頁～五八五頁）。ただし、一八九七年の数字には、ハワイからの転航組が、多くふくまれるが。

⑤ ハイマン・カブリン「高野房太郎——労働運動者の生涯と思想」カブリン前掲編著所収 二六頁～二七頁。

⑥ 高野房太郎「北米合衆国に於ける保護貿易主義」『太陽』二巻一號 一八九六年一〇月二日。和文篇一二二頁。

⑦ 高野のアメリカからの家族宛の手紙。以下、特に記さない限り、高野の手紙の引用は、大島清「労働組合運動の創始者・高野房太郎」(一)(二) 大原社会問題研究所『資料室報』第一〇六号 一九六五年一月、第二二四号 一九六六年一〇月、第三三九号 一九六八年四月所収のものによる。参照。

⑧ 高野房太郎「ヤンキー(Yankee)第一回」『読売新聞』一八八九年一〇月五日。和文篇五九頁～六〇頁。

⑨ 前掲大島「労働組合運動の創始者・高野房太郎」(一) 一四頁。

- ⑩ 註⑥と同じ、六一頁。
- ⑪ 同右 六三頁。
- ⑫ 「……終リニハ Social dance ト申シテ自由ニ「ダンス」ヲ致候ナ併私杯ハ指ヲクワニテ見テ居ル方ニ候。」(高野房太郎の母および弟宛の手紙 一八八七年七月三一日付。前掲大島「労働組合運動の創始者・高野房太郎」(一) 八頁。)
- ⑬ 高野房太郎「北米合衆国の労務社会の有様を叙す」『読売新聞』一八九〇年六月七日。和文篇六七頁～六八頁。
- ⑭ 主として、ジョージ・マクニール編著『労働運動——今日の問題』“The Labor Movement—The Problem of Today”, 1887が「タネ本」になっている。(前掲二村「職工義友会と加州日本人靴工同盟会」一三八頁～一三九頁。)
- ⑮ 「亡命民権家グループ」については、さしあたって、亀井俊介前掲書「4『自由民権』のモデル」、色川大吉『自由民権』第六章「亡命民権家の戦い」(岩波新書 一九八一年)を参照。
- 彼ら「亡命民権家グループ」を考えると、彼らが「鉄道ボス」などと結びついて「利権」あざりをしたことや、のちには「移民会社」に關係し、移民をくいのにしたことにも注意すべきだと思う。高野が政治運動に慎重だったのは、彼らのこのような体質を、嫌っていたことから、くるのかもしれない。
- ⑯ 高野岩三郎「囚われたる民衆」『新生』第二卷第二号 一九四五年二月。以下、同文の引用は、同「かっぱの尻」(法政大学出版局 一九六一年)所取による。四〇頁。
- ⑰ 在米日本人会事跡保存部編前掲書 三三〇頁。
- ⑱ 「其後(最初の渡米後——引用者)一度東京へ帰り(略)長崎にあった小さい山を二百円(略)で売リそれを資本に商ひをやるべく、再び渡航した。(中略)始めマーケットストリートに日本品の商店を出

し、バザーなどをやったが美事に失敗して店をたゝんだ。」(前掲高野岩三郎「兄高野房太郎を語る」一八頁。)

⑲ 高野房太郎「職工諸君に寄す」(片山潜・西川光次郎『日本の労働運動』一九〇一年 岩波文庫版 二五頁)。

⑳ 高野房太郎「金井博士及添田学士に呈す」『國民新聞』一九二二年五月二〇日。和文篇九七頁。

㉑ たといえば、前掲高野「日本に於ける労働問題」一八九一年八月一〇日。和文篇九二頁～九五頁。

㉒ たといえば、「日本人攻撃へ日々度々増シ来ル有様ニ御座候ニ心痛メノ外ナク候」(高野の弟岩三郎宛の手紙 一八九一年六月一日。前掲大島「労働組合運動の創始者・高野房太郎」(一) 一頁)。また、白人労働者による日本人労働者の迫害に対する、強い関心から書かれた

論稿もある(高野房太郎「愛國」記者ニ問フ「遠征」第一四号 一八九二年七月一日。同「愛國」記者ニ与フ『遠征』第一六号 一八九二年八月一日)。さらに、一八九二年、親友城常太郎が中心

となって結成した「加州日本人靴工同盟会」は、白人靴工による迫害に抗したものであった(前掲二村「職工義友会と加州日本人靴工同盟会」一二七頁～一三六頁)。「排日」については、さしあたって、若槻

前掲書、磯谷前掲書。

㉓ 高野の弟岩三郎宛の手紙 一八九〇年二月十六日付(前掲、大島「労働組合の創始者・高野房太郎」(三) 一頁～三頁)。

㉔ 赤羽一のつぎのようなアメリカ像は、象徴的である。

「亞米利加迎も元より自由の樂地では無い、けれども比較的僕に自由を與へて呉れた。亞米利加迎も元より幸福の天國では無い、けれども比較的僕に幸福を與へて呉れた。亞米利加迎も元より理想の郷土では無い、けれども比較的理想到に近い國土であった。(中略)比較的安樂

で幸福で生活の困難少き亞米利加を捨て、不斷の心配と無用の饒舌

に忙殺される日本と云ふツマラヌ馬鹿氣た國に歸らねばならぬであらうか、比較的寛大で安量で、頑愚漢の如きをすら容れて呉れた亞米利加をアトにして、小人と俗物と盜賊と山師の跋扈する日本と云ふイヤナ國に歸らねばならぬであらう乎。……」(赤羽)「乱雲驚濤」一九〇六年『明治社会主義文学集(一)』筑摩書房 一九六五年所収 三一—三五頁。

②⑥ 前掲高野「日本に於ける労働問題」一八九二年八月七日。和文篇 八八頁。

②⑦ 高野のサミュエル・ゴンパース宛の手紙 一八九四年三月六日付 (前掲開谷「高野房太郎と労働運動——ゴンパースとの關係を中心に」一八六頁)。

②⑧ 高野房太郎「北米合衆國に於ける保護貿易主義」『太陽』第二卷一 一八九六年一〇月二〇日。和文篇二四頁—二五頁。

②⑨ 新渡戸稲造『帰雁の慮』②外遊者の着眼——塵や芥ならぬ内にもござる。①⑩宗教の勢力——深さは横に測る。①⑪帰朝——慮の一穂万斛の冀望 一九〇七年。『新渡戸稲造全集』第六卷 教文館 一九六九年。

②⑩ このことは、片山と安部のつぎの言葉に、象徴されている。

「……我國は、政治的・宗教的諸問題において、革命的な最も重要でかつ最も多忙の時代にあり、あらゆる愛國者を必要としている。我々は、我が祖國の將來に役立ち、奉仕する為我々の精神を訓育し、又教養を高める為に、より高い文明の眞の知識を得る目的でこの國へ來てゐるのである。」(片山)「何故我々はアメリカに來るか」アイオワ大學『ニュースレター』第一七卷三三〇—一八八九年一〇月二日。柴田徳衛『若き日の片山潜——新発見資料等の紹介——』『経済と経済学』第二五号 一九六九年一月一〇日所収 一五頁。訳は柴田による。」「凡ての活動は富に基くのであるから米國の如き無限の富を備へて居

る國が萬事に於て牛耳を執るに至るは決して怪むべきではない。米國の生活は實に活動的で何事を見ても生氣が充滿して居る様だ。一たび米國人に接すれば誰にても活發にならざるを得ない。柴田的にならざるを得ない。在米の我同胞は宜しく此文明の泉源に接觸せねばならぬ。我等は西洋の長所を取ってこれを東洋の地に移植するの使命を帯びて居るものであるから出來得るだけ彼の文明の粹を學ぶといふ覺悟がなくてはならぬ。」(安部磯雄『北米之新日本』一一二頁 博文館 一九〇五年)。

#### 4 「富国策」

このようにして、高野は「ガントンの思想」を、AFLあるいは労働騎士団から学んだ組織論をもち帰ってきた。

「吾人は國富の隆盛を圖らんが為めに労働問題の処置を要すると均しく、労働問題を処置せんが為めに國富の隆盛を要す。別言すれば、労働問題を処置するの所以は國富の隆盛を圖るの所以にして、國富の隆盛を圖るは労働問題を処置する所以なり。」<sup>①</sup>

「一言以て之(労働者の状態改善の方法——引用者)を覆へば彼等を教育するにあるが故に労働問題の事實的解決は、其帰着する所如何にして労働者を教育すべきとの問題にあり、且つ夫れ労働者の智見開發は単に彼等の状態改善策として之を要するのみならず、我産業社会の前途の盛衰亦之を要する者ありて存す。」<sup>②</sup>

これを理論としてみれば、何度もくりかえしたように「ガントンのもの」でしかない。だがここでは、そこに、いままでのべてきたような在米体験のありようのなかで、「日本社会」の「後進性」を実感させられている高野の姿を「社会ヴィジョン」を生みだした心情を見出すことが、高野の思想構造を考えるうえで、必要である。

高野は、一八九七年の労働組合期成会成立前後の論稿である「自殺的日本の工業」のなかで、つぎのようなことをいっている。労働者を犠牲にして、貿易立国として国をたてていくよりは、労働者を豊かにすることによって富国をはかるべきである。富国のものになる、労働者の生活を犠牲にすることこそ、日本を自殺に導くものである<sup>③</sup>。ここには、高野の「社会ヴィジョン」がよくできている。このような「社会ヴィジョン」と、労働者の知的向上が肝要であるという「労働運動論」とをつきあわせれば、高野の心情はつかめたといつてよいだろう。

高野の心情は、いいかえれば「タネ本」に託した思いは、労働者(民衆)を「安寧幸福」にしてこそ、「文明化・富国」があるのだ、ということだった。このことが、思想的にみれば、高野が自らの在米体験を労働運動に収斂させた意味である。

わたしが知る範囲では、つぎのような大島清と池田信の評価が、

現在までの高野研究の決定版である。

「高野は、当時の多くの社会改良家や進歩的思想家がそうであったようなキリスト教社会主義者ではない。また自ら言うように、たんに労働者への同情から運動を始めたヒューマニストでもない。貧苦のなかに半生をすごした生活体験から、根底において労働者と同じ感情はあったにしろ、彼は一歩をすすめてナショナリズムの立場——すなわち、労働運動は日本人と国家の発展のために有効であり必要であるという進歩的ナショナルリズムの立場から、運動をおこしている。」<sup>④</sup>

「国家の主導下に富国強兵策を推進して急激にその工業化をすすめていた日本の國家的見地になつて、彼は開明的有識者としての立場から労働の調和をはかりながら資本主義的工業化を推進する途をもとめた。そして、労働組合による教育活動がその経済活動および労働者保護立法とあいまって賃金を上昇させ、さらに富国をすすめると判断して、この見地から労働組合論をくみだした。」<sup>⑤</sup>

ここでいわれていることは、ほとんど同じであるが、このような評価では結局、多くの明治人がそうであったように高野にとっても国家が骨がらみであった、ということにしかならないと思う。つまり、時代に属していた、と。問題は、「一歩進んだ」ことで

も、「開明的有識者としての立場」にあるのではない、と思う。高野の思想の構造では、「労働者の安寧幸福」と「富国」とは裏表であり、それをふわけしていずれか一方だけをとりだして強調するのではなく、いわば「コミ」のものとして構造的にとらえるべきものであるから。問題は、「労働者の安寧幸福」のために、あるいは社会状況に対する憤りから労働運動に関心をもちながら、その関心を社会思想としてくみだてたとき、「富国策」がくりこまれることにあるのだ、と思う。

わたしの考えでは、明治三〇年代当時において、何らかの意味で積極的に社会問題を論じ、社会思想をくみだてたとき、そこに「富国策」をくりこむことなしには、その思想がなりたたなかつたのだと思う。明治期の社会主義思想も、表面の字句に惑わさなければ、社会批判と「富国」とは抱合せてあり、「富国」思想としても読めるのである。高野の社会思想を「社会ヴィジョン」としてみると同様に、当時の「進歩的」な社会思想を「社会ヴィジョン」としてみれば、そこに高野と共通のものを見出すことは容易なはずである。いいかえれば、高野の「社会ヴィジョン」は、思想の深さとひろがりとは別として、明治資本主義確立期における経済社会と民衆の対立・矛盾を意識化した、「国権」と「民権」の融合を課題とする「進歩的」な思想のなかに、はいるものだと

思う。あるいは、考えようによっては、高野の「社会ヴィジョン」は、すでに明治二〇年代に徳富蘇峰によって「生産的の社会」・「平民的社会」として語られていたものに、蘇峰と比べて粗雑であるにしても、近いかもしれない。そして、蘇峰がこの時期それを捨て去ろうとし、「進歩的」知識人から見離されていたことを思えば、高野の「社会ヴィジョン」は、労働運動をもちこんだことを別にして、当時の思想界では、「遅れた」ものであったかもしれない。

- ① 前掲高野「富国の策を論じて日本に於ける労働問題に及ぶ」一八九三年二月一八日。和文篇一一〇頁。
- ② 高野房太郎「日本に於ける労働問題」『社会雑誌』第一卷第二号一八九七年五月一五日。和文篇一三三頁。
- ③ 高野房太郎「自殺的日本の工業」『社会雑誌』第一卷第四号一八九七年七月一五日。和文篇一三五頁〜一三八頁。
- ④ 大島清「労働組合の創始者・高野房太郎」『世界』一九六八年二月月号 二二八頁。この論稿は、前掲大島「人に志あり」に、「労働組合の創始者」として収められている。
- ⑤ 池田信「日本社会政策思想史論」一四〇頁 東洋経済新報社 一九七八年。

## 5 運動からの離脱

周知のように、高野が労働運動に従事したのは、一八九七〜一九〇〇年のことである。この間、期成会・鉄工組合の結成、社会

政策学会への入会、工場法運動、「共働店」の経営、普選運動への参加、と数々の活動をおこなっている。その過程で、高野と片山の運動方針がわかれてきて、片山が主導権を握ったことは、多くの研究者が強調するところである。だがわたしは、初期労働運動・社会主義の思想の構造をつかむうえで、高野と片山の軌跡は、その相異性を強調するよりも、同質性に注目したほうがよいと考えている。そのことをはっきりさせるために、高野の運動からの離脱のあり方をみてみたいと思う。

高野が運動から離脱したのは、一九〇〇年の九月頃であるが、その頃には一八九七年からつづいていた期成会・鉄工組合、活版工たちの運動は、事実上組合の実体を失っていた。高野の運動からの離脱の要因については、このことと治安警察法の施行、またそれと関連することだが、運動が反体制色を濃くしていくのに対して思想的に対応できなくなったこと、をあげるのが普通である。いずれにしても、運動の挫折から高野の社会思想では、状況に対応しきれなくなったことを要因にあげているとみなしてよいだろう。ハイマン・カブリンと池田信のつぎのような見解は、その代表的なものである。

「労働運動に対して国家が打撃を加えたこと（治安警察法——引用者）は、高野にとって粉砕的な効果をもった。彼は闘士で

はあったが、彼にとって殉教者になることは無意味であった。将来の闘いも無益と考えると、彼は労働界から完全に退いた。」<sup>①</sup>  
「……労働者が教育・共済活動に満足せず、闘争組織を結成しストライキを武器にして使用者に待遇改善を迫ろうとするに至るとき、彼はその対応策をもたなかった。（中略）彼はまた、労働者が選挙権をもたないときに政治運動をやって政府や支配階級の反目をかうことは愚行だと考えていたので、片山のように政治運動に活路を見出そうとすることもできなかった。（中略）鉄工組合の主要な活動の一つとして重視していた共済活動がはやくも九九年なかごろから行きづまった。（中略）さらに高野を困惑させたのは、治安警察法の公布（一九〇〇年三月）である。（中略）期成会、鉄工組合はともに行きづまり、一九〇〇年末にはほとんど影響力をもたないまでに衰退した。これらの困難は、もはや開明的有識者の立場から構成された彼の労働運動論をもってしては克服できないものであった。同年秋には運動をはなれ、日本を去った。」<sup>②</sup>

だがここで、わたしは、高野が離脱について語ったものを残していないことを、思い起してみたいと思う。それだけかえって、離脱に関してさまざまなことを考える余地が残されているから。

一九〇〇年の高野の足跡としてわたしたちがもっているのは、

三月二〇日(治警法施行日)に、普通選挙期成同盟会の幹事になったことである。高野が同盟会幹事になったのは、片山と同様に「議会によって決定されたものは議会において否決することができる」と思ったからかもしれないし、工場法運動、組合運動の過程を通じて政治活動の必要性を感じたからかもしれない。あるいは、単にいきがかり上だったかもしれない。いずれにしても、同盟会幹事となり演説をする程度には、労働運動と普選運動が結びつくという、当時の社会運動の流れのなかに、身をおいていたことだけは確かである。政治運動に慎重だった高野が、政治運動にのりだしたことのなかに、初期労働運動をとりまく状況の変化が表われているといえなくもない。そこに、高野の社会思想の変化の徴候を見出すこともできるかもしれない。この同盟会幹事になったことやその後の普選運動、そして鶴澤幸三郎らの厚信会や横山源之助の動向を参考にすれば、カブリンや池田がいうほどには、高野が一九〇〇年に運動から離脱しなければならぬ思想的な理由は見あたらない。そこには、別の要因が働いていたと考えたほうがよいと思う。(それは、わたしの考えでは、生活上からくるものである。このことは6章でふれる。)

離脱の意味を思想的に考えるうえで、高野が、離脱にさいしても、その「社会ヴィジョン」を変えなかったこと、いいかえれ

ば、運動の体験が「社会ヴィジョン」には影響をあたえなかったことをとりあげることが必要である。このことは、最後のまとまった論稿である「職工組合に就て」(一九〇〇年五月)の、自分の理論の正しさを書き残しておくのだ、という文体のなかによくできていると思う。

「職工組合が教育機関として労働者の智見を開発せるの結果として来るべき者は、經濟上に於ては賃銀の騰貴なり、夫れ一國に於けるの文化の度、益々高くして、其國民の生活程度益々高く、生活の程度益々高くして賃銀益々高きを致す者なり、(中略)高度の賃銀を得るの労働者は、能く買ふ所の労働者なり、能く買ふ者の多きは能く賣れる所以なり、而して能く賣るゝは即ち商賣の繁昌にあらずや、工業の盛榮にあらずや」<sup>⑧</sup>

高野は、帰国後、とりわけ労働運動にたずさわってから、労働者(民衆)の生活の苦境を通して、社会状況に対する苛立ち、憤りを随所で語っている。この「職工組合に就て」も、労働運動をとりまく状況に対する苛立ち、憤りのなかで書かれたことは、その文体から、そしてこれが鉄工組合の崩壊時のものであることから明らかだと思う。ここからいえることは、書かれたもののみを限り、高野が、「将来の闘いを無益」だとか、自分の理論では「困難」を「克服できない」などとは、思ってもいなかったことであ

る。(孤立感はあったろうが。)つまり、高野は、運動からの離脱に際して、「社会ウィジョン」を放棄も、修正もしていないのである。それも、状況とのきしみがなかったからではなく、きしみがあっても放棄も、修正もしなかったのである。状況とのきしみを「反体制」の一つの必要条件とするなら、高野も当時の「社会主義者」程度にその条件を備えていたとは思ふ。だが、わたしがこのことをいうのは、高野が「反体制」の意識をもちながら、社会主義運動にいかなかったのは、「温和な労働組合主義者」だったからだ、そこに限界をみる、といった俗論をもちだしたためではない。もちろん、「反体制」の運動家として、もちあげたいからでもない。一つには、状況とのきしみを思想化するとき、つぎのように「世界の大勢論」的発想で「タネ本」をえらんでいたことをいいたいからである。

「夫れ人類社會發達の歴史は競争、團結及び進歩の歴史なり。蓋し競争は團結の母にして進歩の父、競争先づ團結の必要を起し、競争益々甚だしくして團結益々鞏固に、社會の進化益々其歩武を進む是れ進化の歴史なり。職工組合の起源及其發達に於ける歴史も亦此の如し、其起るや競争の爲めのみ、其發達するや進化に伴ふのみ、左れば職工組合の歴史は人類進化の一小歴史にして、其存在、其發達、更に人類社會の進化史と異なる處

なきなり。」<sup>⑩</sup>

このような発想をもつ限り、状況とのきしみがあつたとしても、思想的に社会構造と格闘できないことは明らかである。

ここで、わたしがさきに、初期社会主義の思想は、「富国」思想、「富国」の「社会ウィジョン」としても読める、といったことを思い出してほしい。たとえば、明治三〇年代の片山潜の思想は、「社会学」「労働運動」「社会主義」という思想の衣装を、運動の推移にしたがつて、同じ「富国」の「社会ウィジョン」のうえにまとつたものにはすぎない。これが、片山の思想の「進歩」の一つの実体である。

「社會學の眞目的は社會の疾病を療治するにあらずして社會の健康をして益々發達せしむるにあり」<sup>⑪</sup>

「労働問題は——引用者——此危急存亡の秋に在り調和の油を工業海に施し以て労働者の進歩を計り工業の盛大を期するは實に改良家に取りて缺く可からざるの務なりとす。」<sup>⑫</sup>

「以上論ずる如く社會主義の生産は資本家の生産に優る點多く且つ現資本家的生産は不知不識の間に社會主義の生産に進行し來れるを見る。是れ實に經濟進化の順序にして當然のことなり。」<sup>⑬</sup>

この片山の例からうかがえるように、初期社会主義の「社会ウ

「イジョン」は、結局、「民権」の伸張と強固の産業社会をいかに早くコミで実現させるかであった、とわたしはいえると思う。また、その「社会ヴィジョン」を支えていた発想が、「世界の大勢論」的なものであったことは、明らかだと思う。

「社会主義は決して一國の土地及び資本を分配せんとするものにあらず、唯生財機關たる土地及び資本を公有として、其により生ずる所の財富を公平に分配せんと欲するのみ。而して一人の所得は果して幾何なるべきかこれを精算すること能はずと雖も、現社会に於ける生産が自由競争の爲に如何に多く其額を減じられつゝあるかを想へば、社会主義の實行せらるゝ日に於て、其生産の大に増加すべきは決して疑ふべからざるなり。」<sup>⑭</sup>

「何者も日本に輸入されつゝあり。獨り労働運動に於てのみ然らざる乎。否既に日本にも労働運動始まりたり。既に此の始まりたる労働運動は歐米流とならずして止むべき乎。或は之れ疑問なりと云ふ者あらんかなれども、吾等は斷言す、歐米の如くなるべしと。」<sup>⑮</sup>

「我黨は實に時勢の必要に應じ此の如きの抱負を以て生れたるなり。見るべし、社会主義は個人的競争主義、唯我的軍隊主義に反対するものにして、民主主義は人爲的貴族主義の對照なることを。之を概言すれば社会民主黨は貴賤貧富の懸隔を打破し、

人民全體の福祉を増進することを目的となすものなり。噫これ世界の大勢の趣く所にして人類終局の目的にあらずや。」<sup>⑯</sup>

ここまでくれば、高野と初期社会主義の思想構造を、おおよっぱにはいえ、比較することができると思う。そこに、わたしたちが、「民権」の伸張、「富國」、「世界の大勢論」的発想、といったほぼ同質のものを見出すことは容易なはずである。いや単に見出すだけでなく、その同質性こそ注目しなければならないはずである。たとえ、そのうえにまごつた思想の衣装が、一方が、「急進的」で「反体制」のものであって、もう一方が「穩健」で「労資協調」のものであったにしても、である。うわべの衣装ではなく、実体をとらえるべきだから。そして、衣装にまどわされたら、わたしたちは、そのよっている「タネ本」のちがいを、そこに見出すだけかもしれないからである。（ここで、初期社会主義が右のような構造をもつのは、明治資本主義が確立期であったこと、欧米への「後進意識」があったことなどについてふれる必要があるだろうが、それは別の機会にゆずりたいと思う。）わたしが、この章の冒頭で、高野と片山の軌跡の同質性に注目したほうがよいといったのは、ここからきている。高野が運動から離脱したのに対し、片山が目標をまず「ブルジョア・デモクラシー」の獲得においた熱心な日常活動をおこなったように、たしかに二

人は別の道を歩んではいるが、二人の思想構造は、ほぼ同質なのである。二人の軌跡の相異は、思想的には、ちょっとした選択のちがいでしかない、とわたしは考えている。

このことについて、もう少し立ちいってみたいと思う。「世界の大勢論」的発想、「タネ本」思想によってとらえられた日本の「近代化」は、おどろくほど一面的なものであったといつてよいだろう。それは、欧米と日本の社会構造のちがいを、時間的な「先進性」と「後進性」の問題とし、「封建性」も「近代性」もともに強固にからみあって独自の構造をもつ「日本の近代化」を、欧米化とイコールとしたものであった。このような「近代化」とらえかたでは、社会構造の実体に手がとどかないのは、いうまでもないことだろう。そこから、周知の高野の組織論に典型的な「無知蒙昧」という無残な民衆像が、生みだされているのである。つまり、「近代化」以前の遅れた存在としての民衆像が、そこでは、思想が単に思想として完結していて、「タネ本」をかえることとはあつても、結局、現実の動向が思想にくみこまれることはないのである。「世界の大勢論」的発想、「タネ本」思想が、いかに真摯な問題意識、ヒューマニティからくるものであつても、それでもってしては、無残な民衆像しかもちえなく、社会構造を見誤ることになつたこと、をわたしは強調する必要があると思つて<sup>①</sup>。

このように考えることによって、高野の運動からの離脱を、思想的にとらえることができるのだと思う。ここでは、離脱そのものより、運動の体験が、状況とのきしみが、思想、「社会ヴィジョン」にほとんど痕跡を残さなかつたことのほうが、問題となるのである。高野とて、「社会ヴィジョン」の現実感が薄らぎ、状況への憤りが増しつゝあつたことは確かである。だが、そこから社会思想を構造的に問うことなく、「タネ本」思想をもつたまま、生活を選んだのが、わたしたちに高野が残した軌跡である。

① 前掲カブリン「高野房太郎——労働運動者の生涯と思想——」五二頁。

② 池田信前掲書 一四二頁。

③ 「普通選挙期成同盟会集會」『労働世界』第五八号 一九〇〇年四月一日 復刻版 五四四頁。

④ 隅谷三喜男『片山潜』一〇四頁 東京大学出版会 一九七七年。

⑤ 高野は、労働者が選挙権を奪われていることからくる政治上の不利益について、ある程度不満をもつていたので、その意味で普通運動に参加するだけの根拠があつた、とさえなくもなる。(前掲高野「Labor Movement in Japan. 英文論一〇頁。高野房太郎 Proposed Factory Act in Japan. *American Federationist*, IV, No. 11 (January, 1898). Reprinted in *Railroad Trainmen's Journal*, XV, No. 2 (February, 1898). Partially reprinted in *Ganton's Magazine*, XIV (March, 1898). 英文論六八頁〜六九頁。)

⑥ 高野房太郎 A New Trade Union in Japan. *American Federationist*, IV, No. 12 (February, 1898). Reprinted in *Railroad*

*Trainers' Journal*, XV, No. 3 (March, 1898). 英文篇七一頁。

⑦ 普選運動については、松尾尊亮『大正デモクラシーの研究』、「普通選挙運動の史的考察」青木書店 一九六六年。鶴澤らの厚信会については、水沼辰夫『明治・大正期自立的労働運動の足跡、印刷工組合を軸として』『第一章』JCA出版 一九七九年。横山源之助については、立花雄一『評伝横山源之助——底辺社会・文学・労働運動』創樹社 一九七九年 参照。

⑧ 高野房太郎「職工組合に就て」『労働世界』第六一號 一九〇〇年五月一日 復刻版 五六九頁。

⑨ たとは、前掲高野「自殺的日本の工業」。高野房太郎 *Japanese Farmers, American Federationist*, V, No. 9 (November, 1898).

⑩ 前掲高野「職工組合に就て」第六〇號 一九〇〇年五月一日 復刻版 五六一頁。

⑪ 片山潜「社会学と社会改良との関係」(下)『社会雑誌』第一卷第二号 一八九七年五月一日 片山潜生誕百年記念会編『片山潜著作集』第二卷 河出書房新社 一九六〇年 所収 一〇頁。

⑫ 片山潜「日本に於ける労働問題」『六合雑誌』第二〇〇号 一八九七年八月一日『資料日本社会運動思想史』3 青木書店 一九六八年 所収 五七頁。

⑬ 片山潜『我社会主義』一九〇三年 実業之日本社版 一九四九年 三二二頁～三三三頁。

⑭ 「社会民主党宣言」一九〇一年。労働運動史料委員会編『日本労働運動史料』第二卷 所収 三四九頁。

⑮ 前掲片山・西川『日本の労働運動』二五七頁。

⑯ 前掲「社会民主党宣言」三五〇頁。

⑰ このように考えるなら、片山の熱心な日常活動は、思想的にみて、何もなかったことと同位である。

## 6 おわりに

ここでわたしは、高野の運動からの離脱の意味を、角度をかえて、「生活史」からさぐってみたいと思う。

どうもわたしたちは、高野がアメリカからも帰ってきたものは「労働運動」だけだ、と思いきみすぎているようである。一時期日本での「材木伐出場」の開業を本気で考えていたことからも、高野が「アメリカ社会」ではなくんだものには、「商売気」もあったと考えたほうがよい。明治三〇年代にたくさん出版された渡米に関するハウ・ツーものを著者の在米体験として読むとわかるが、どちらかといえば、このような「商売気」の類のほうが、在米体験者にひろくみられるものである。②もつとも、高野の「商売気」は、渡米前横浜の叔父の回漕店で働いていた頃からあったともいえ、サンフランシスコで「日本雑貨店」を経営したことからも、それが渡米の動機であったといえなくもない。③そこに、高野の生活人としての顔を見出してもよいだろう。高野は、「陽気で開放的」④だったそうであるが、そのような気質とこの「商売気」とは、無縁ではないと思う。

高野はこの「商売気」を帰国後もたえずもっていたと思われるが、考えようによっては、高野にとって、「商売気」も「労働運

動」も、同じ比重をもつものだったかもしれない。なぜなら、この二つを支えていた心情をさぐってみれば、つぎのような面からもなめられるからである。

高野は、渡米まもない一八八七年七月の家族宛の手紙のなかで、つぎのように書いている。

「当米国之事ニ就而ハ萬事熟考ノ上着手致居候小生ノ心事ニ就而ハ決シテ御心配無サレ間敷決シテ粗暴過激ノ事ヲナシテ人ニ笑ハレル様ナ事ハ決シテ不仕候」

また一八九〇年の手紙のなかでは、友人たちが帰国後、これといった「事業」ができないのは、アメリカと日本の「事業」のなりたちかたがちがっているのかと思ったりもしているが、アメリカでの経験をいかして「事業」ができるように、すこしでも「学事ヲ研究」したいと思っている。といってもそれは、別段「高ナル専門ノ科学」をということでなく、人に、あの人はアメリカまでいったのに「外人」と満足に会話もできないではないか、といわれない程度の「普通ノ学問」をということである。そのため「商業学校」に通うつもりだ、といった意味のことを書いている<sup>⑥</sup>。また同じ時期の手紙のなかで、世間は渡米者に過大の期待をかけるが、渡米者が現実にはたいした事業ができないのは、それだけの事情があるのだ。過大の期待をもたれるから、渡米者は帰国

しづらく、結局、無為のままですると、アメリカにいることになってしまふのだ、といったことも書いている<sup>⑦</sup>。ここから、高野が、都市の小市民層のように、生活的には下層でありながら、世間体をたえず気にして「かまえ」をもち、身をたてるべく上昇志向をもっていた、といったらいすぎであろうが、生活の意識としては、ある「かまえ」をもっていたことだけは言うことができると思う。その「かまえ」は、小説を読み翻訳したこと、経済学を独学したこと、そして「労働運動」に関心をもちたこと、なかにもみることができると思う。わたしの考えでは、その「かまえ」は、高野が経験した順境から逆境への生活体験、そして母<sup>⑧</sup>、ですがかもしだす高野家の雰囲気からきているように思う。姉キワからの高野宛の一八九五年の手紙のなかに、「他日業成り名譽テ」<sup>⑨</sup>という一節があるが、この言葉は、弟岩三郎の軌跡も参考にすれば、<sup>⑩</sup>高野家をつつんでいた雰囲気<sup>⑪</sup>を物語っているだろう。高野の軌跡を考えるうえで、これらのことは、充分勘定に入れておく必要があるのである。

わたしは、高野の一八九七年から一九〇〇年の足跡をみていくと、その過程で「運動は運動だが、オレは商売もやってみたい」と思う気持が、段々強まっているように思う<sup>⑫</sup>。運動の退潮が、そのような気持を強まらせたことはいまでもないにしても、それ

と同じ程度に、一八九九年前半頃に結婚し翌年子供が生まれたという事情、つまり家庭をもったことが働いていたように思う。なぜなら、一八九八年一月から翌年八月まで横浜での「共同店」の経営は、運動の一環というより本格的な「商売」であり、一八九九年一〇月から翌年中頃までの八丁堀での経営もその面が強いからである。<sup>14</sup> おそらく、運動からの離脱の直接的な理由も、「義和団事件」の勃発をみて、在米時からの親友で職工義友会の仲間でもあった城常太郎と、中国で「商売」を始めることにあったと思われるのである。<sup>15</sup> 家庭をもったことが契機となって「商売気」が頭をもたげてきたことが、運動からの離脱の大きな要因となった、という考えをわたしはとりたと思う。

わたしたちが、高野の思想のなかに、書き残した論稿のなかに、このような「生活史」をみることはできないことに、ましてそれがもみこなされていぬことに、気づくのは容易なはずである。いいかえれば、思想と生活体験・社会体験がまったく別のもので、思想は単に思想であったことに、気づくのは容易なはずである。ここで、わたしがさきに、高野の最後の論稿である「職工組合に就て」の文体が、自分の理論の正しさを書き残しておくのだというものからなっている、といったことを思い出してほしい。このことと高野の運動からの離脱をつきあわせるならば、つまり思想

の構造とつきあわせるならば、離脱は、単に「商売」にのりだすためだった、としかいえないのである。おそらく、高野もそのように考えていたはずである。だが、ここでこのことをいうのは、高野にとって労働運動がどうでもよくなったのだ、といたいからではない。このような離脱は、いつでも条件次第では、そのままの思想でもって運動に復帰できることをいいたいからである。これは、思想にとって、無残なことだ。

ここでも、わたしたちは、いままでのべてきたような生活体験・社会体験をしゃ断した思想構造を、みることになるわけである。いいかえれば、「アメリカ社会」での「出稼ぎ」としての体験をしゃ断し、「アメリカ社会」の現実に目をつぶって「アメリカ社会」をモデルとした、思想としての在米体験をみるわけである。そして、「無知蒙昧」という民衆像と、「日本的近代」の社会構造を単に「後進性」ととらえていることも。

このような思想構造に、わたしのいう「タネ本」思想に、高野の、初期労働運動の、そして初期社会主義の位相が集中してあらわれている、というのがわたしの考えである。

わたしが現在調べた範囲では、さきにもふれたように、片山潜・安部磯雄・西川光次郎・幸徳秋水らの思想構造は、高野との相

異性よりも同質性を強調すべきものである。また、工業団体同盟会・鉄工組合の鉄工たちの、岸山芳太郎・岸上克己・岡千代彦ら懇和会・活版工組合・誠友会の活版工たちの、いわば「先進的職工」とも呼ぶべき職工たちの、それにも同様のことがあてはまる。

わたしは、近い機会に、片山・安部の思想としての在米体験、

そして片山・安部らと「先進的職工」の「近代主義」的な思想構造と「社会ヴィジョン」について、論じたいと思っている。本論とその作業をあわせれば、初期労働運動・社会主義思想が、単なる啓蒙的な「タネ本」思想であった、というわたしの問題意識は、もっとはつきりするはずである。

- ① 高野の弟岩三郎宛の手紙 一八九〇年一〇月九日付、十一月二日付、十一月六日付(前掲大島「労働組合運動の創始者・高野房太郎」(三) 三頁〜四頁、六頁〜七頁、一頁〜三頁)。

② わたしは、国立国会図書館で、このハウ・ツーものを三十数冊読んだが、その多くは、「英語を一週間で話せる法」といった類の、ワイ本に属するものであった。だが、そのなかでの渡米を奨励する理由(読者に本を売るためのカンビ、ころ、読者が欲している「アメリカ」に、ある共通項があることに気がついた。かんたんにいえば、それは、アメリカは「立身出世」のチャンスが多く、「勤儉力行」がむくわれる国である、アメリカにあって「先進文明」にふれることは、日本の「近代化」にも役立つ、という二つである。とりわけ、ほとんどの本が、前者を強調しており、そこに、著者たちの思想としての「在米体験」を見出しもよいと思う。たとえば、

「……米國は天然の物産に富むのみならず賃金高く從て物價高く工業の盛なる世界第一と稱せらる此處に移住する人最初より比墳墓の地と定め腰を落着けて一大目的に向つて違大の企畫を立て、目を他にくれずして勤勉せば更に通常一般の成功にあらずして大成功する疑なきは在米の日本人の成功者に見るの如くなるべし」(日本力行會編『最近渡米策』一〇頁 一九〇四年)。

「……イクラ威張つても、日本の商工業は、マダ／＼幼稚で、比較の價値が無い、ドウカ一人でも、澤山に此の盛大な米國の商工業の實況を知らしめて、發憤させたいものだと言々話したのであります」(察敏之「米國の商業経営」山根悟一編纂『最近渡米案内』六四頁 渡米雜誌社 一九〇六年)。

- ③ 高野の旅券の渡米目的には、「商業研究之為」と記されていた。(前掲隅谷「高野房太郎と労働運動——ゴンプースとの關係を中心に——」一八一頁)。

- ④ 大島清「高野岩三郎伝」四二六頁 岩波書店 一九六八年。

- ⑤ 一八八七年七月三日(前掲大島「労働組合運動の創始者・高野房太郎」(一) 八頁)。

- ⑥ 岩三郎宛の手紙 一八九〇年一〇月九日付(前掲大島「労働組合運動の創始者・高野房太郎」(二) 三頁〜四頁)。

- ⑦ 岩三郎宛の手紙 一八九〇年十一月六日付(前掲大島「労働組合運動の創始者・高野房太郎」(三) 一頁〜二頁)。

- ⑧ まずについては、つぎのことを参照。

「母はマスと云ひ、当時の風習がそうであったやうに、教育はあまりなかった。しかし仏教の禪宗の信仰を強く抱いてゐた。が、子供には決してそれを強いやうとはしなかつたし、私供も既成宗教に捉はれる事がなくしてすんだ。

又信仰と結びついて信念を持つてゐた。それは人間正直でさへあれ

ばい。至誠は天に通じると云ふ信念であった。」(前掲高野岩三郎「兄高野房太郎を語る」一六頁。)

「しかし三十七歳の若さで未亡人となった母は健康無比かつ男勝りの婦人であったので……」(前掲高野岩三郎「囚われたる民衆」四一頁。)

「母まずは子供をきびしく教育し、また年に似ず進歩的な考えをいだく人であったが、その母に対する彼(岩三郎——引用者)の孝養は彼の家庭を知る人に深い印象をあたえた。」(前掲大島『高野岩三郎伝』四二六頁。)

わたしが思うに、まずは、世間に顔むけできないことはしない、経済的にしっかりする、世の中の役に立つ人間になるように、と子供をきびしくつけたはずである。高野兄弟に「かまえ」がある、とわたしたちが感じるのは、ますがかもしらず、そのような高野家の風風から、兄弟が足をふみはずさなかつたからだと思う。

⑨ 一八九五年五月一日付(前掲隅谷「高野房太郎と労働運動——ゴンパースとの関係を中心に——」二一四頁。)

⑩ 前掲大島『高野岩三郎伝』参照。

⑪ 高野に定期収入をもたらしていた、ゴンパースへの「通信」が、一八九八年一〇月で中断し、翌九九年八月で最終的に途絶えたことは、その一つの傍証になるだろう。(前掲隅谷「高野房太郎と労働運動——

ゴンパースとの関係を中心に——」二二五頁。)

⑫ 高野の長女みよが、一九〇三年二月で満三歳一ヶ月であることから推定。(入交好脩「口絵写真解説」カブリン前掲編著)。水沼辰夫によれば、高野は柳屋(期成会・鉄工組合の月次会・演説会が開かれ、本部も一時おかれた)の娘と、「意気投合して結婚」したそうである。(水沼前掲書四二頁。)

⑬ 高野が、常任幹事をしりぞいた際(一八九八年一月)、期成会から金五〇円と感謝状が送られていること(『労働世界』第二八号一八九九年一月一五日 復刻版二八九頁)。また、その「共同店」は、「横浜鉄工共営合資会社」の名で「資本総額五千円」・「業務担当社員・高野房太郎」として、一八九八年二月二日付で、「商業登記公告」されていること(『横浜貿易新聞』一八九八年二月三日)参照。

⑭ その経営のため、有給幹事から無給幹事になっている。(鉄工組合本部臨時本部委員会総会議事速記録「『労働世界』第五五号 一九〇〇年二月一五日 復刻版 五一八頁。)

⑮ 「英文欄」『労働世界』第六五号 一九〇〇九月一日 復刻版 六〇四頁。『労働世界』第六七号 一九〇〇年一月一日 復刻版 一六頁。前掲高野岩三郎「囚われたる民衆」四三頁。

(京都大学大学院生